

2023 年 1 月 21 日開催
外部評価委員会

2022（令和 4）年度
外部評価委員会 報告書

仙台白百合女子大学

2022年度仙台白百合女子大学 外部評価委員会報告書

外部評価委員会について

本学では「自己点検・評価委員会規程」に基づき、自己点検・評価活動の客観性・公平性を担保し、教育研究水準の更なる向上を図るため、外部有識者による評価を行う外部評価委員会を設置しています。

また、教育・研究の質を担保するために、自らに対して以下の評価を行っております。

- ① 年度毎の学内各部署による自己点検評価（内部評価）
- ② 年度毎の(学内)内部質保証システムによる大学全体の運営に関する内部評価
- ③ 大学基準協会による7年毎の認証評価を通しての外部評価
- ④ 年度毎の外部評価委員会による外部評価

外部評価委員会は④に該当するもので、大学が外部から評価を受け、より多様で客観的な意見を大学運営に反映させられるようになることを意図したものです。

2022年度 外部評価委員会 開催概要（敬称略）

開催日時	2023年1月21日（土）11：00～12：30	
場所	オンライン（Zoom 会議）	
外部評価委員	木村 賢治朗	仙台市泉区長
	清水 勝幸	学校法人アトメント会聖ヨゼフ学園理事
	遠藤 忠章	カメイ株式会社 管理部長
	福井 公美子	NPO 法人 SCR
	藤村 純子	株式会社ヤナセ札幌東北営業本部総務部 総務経理課主任職
	浅野 浩子	本学名誉教授
本学出席者	矢口 洋生	学長
	大本 泉	学部長
	呂 光暁	人間発達学科准教授 教育課程と学修成果担当
	結城 裕也	心理福祉学科准教授 入学者選抜担当
	志田 昌幸	事務局長
	佐藤 一樹	庶務課

当日次第

1. 本学学長挨拶
2. 出席者紹介
3. 委員会の目的・議事進行についての説明
4. 「教育課程と学修成果」「入学者選抜」
5. 閉会挨拶

学長挨拶

矢口学長より、本学の設立母体シャルトル聖パウロ修道女会と大学の沿革についての説明後、名簿に基づき外部評価委員および本学出席者の紹介があった。

本委員会の目的および議事進行の説明があり、本学側から「教育課程と学修成果に関する IR」「入学者選抜」について担当者からプレゼンテーションを行い、外部評価委員から忌憚のない意見をいただきましたという旨の説明があった。

プレゼンテーション

(1) 教育課程と学修成果に関する IR

大学の教育課程はディプロマポリシーやカリキュラムポリシーに基づき独自のカリキュラムを編成している。また、文部科学省から様々な答申や方針が出されており、近年の動向は学修者の主体性と学修効果の可視化と言える。学修者の学修成果は主に成績で評価してきた。今回の調査は教育課程について学修者の視点から調査を行った。

本学の教育課程を学修者の総合評価によって教育課程の達成度を考察し、教育課程の課題を洗い出すという客観的手続きを用いた。4年間の大学生活に対する満足度等を総合的に計る調査項目を構成した。

【図Ⅰ. 大学生活に必要なこと】では「人との出会い」、「同級生との交流」があげられるが、割合が多かったのは「大学の授業」であった。

【図Ⅱ. 大学で身につけた能力】では、「幅広い視野から物事を考えることができる能力」や「論理的に物事を考えることができる能力」の割合が高めだが、一番の割合は「自分の気持ち・考えを適格に表現できる能力」と言える。

【図Ⅲ. 入学前に期待していたこと】は「教育内容（資格取得に関係する）」が一番多かった。他には「友人関係」や「就職」があった。

【図Ⅳ. 本学で学んでよかったこと】は「友人関係」や「実習」があるが、一番は「教育内容（資格取得に関係する）」であった。

【図Ⅴ. 本学で学んで期待外れだったこと】は、クラブ・サークル活動があげられる。また、「本学で学んで期待外れだったことはなかった」の割合も高く、学生はある程度期待したことが実現できたという評価と考える。

【図Ⅶ. 大学の授業に満足していますか】では、「満足している」と「やや満足している」の合計が 88% を占め学生の評価は高いといえる。

【図Ⅷ. 大学生活を総合的にみて、満足していますか】では「満足している」と「やや満足している」の合計が 98%あり、学生からは高い評価を得たと考える。

いくつかの質問の相関関係を計った結果、「自分の気持ち・考えを適格に表現できる能力」が、他の質問との相関関係が高い。学生が自分自身の気持ちや考えを表現できる能力をもって評価していると言える。

結果として 2020 年度卒業生は、

1. 「大学の授業」と「教員や学生同士との関係」に重きを置き大学生活を過ごしていた。
2. 進学時に本学に期待したことがかなりの程度で実現したことが確認できた反面、クラブ・サークル活動や設備・施設においては期待外れだったことが確認できた。
3. 学修効果において①自分の就きたい仕事に直接関係する知識と技術という専門的な能力と②自分の

気持ち・考えを的確に表現できる能力という汎用的な能力を獲得したという2つの観点から評価したことが相関関係からみることができる。

4. 大学授業に対する満足度と自分の気持ち・考えを的確に表現できる能力の定着度をもって、大学生生活の総合的な満足度を評価したことが確認できた。

まとめとして IR は大学の方針や政策に参考材料として情報提供することが位置づけである。大学の授業は重要である。学生が自分自身の気持ちや考えを表現できる場面や学修活動の場を提供する必要がある。学生が主導する演習系の授業もあるが、多くは講義形式の授業である。教員が専門性をもって目的や内容を確認して授業していくが、その中でいかに学生が参加するか、どれだけ学修度があったかを判断できるかが大学教員として注目する点であることを改め確認することができた。

事前質問について

PROG テストは汎用的な力を計るテストであり、大学の専門性と離れることがある。大学の専門科目の成績と相関関係を計ってみたが、相関はなかった。PROG テストで計っている力と大学の成績とは違うと言える説明があった。

(2) 入学者選抜について

入学試験結果データからの検討およびオープンキャンパス (OC) 来客者歩留まり率推移からの報告をする。

リクルート総研によると全国の18歳人口が2021年114万人から2033年には101万人となり2021年比で12万人減少と予測されている。また、大学進学者からみると2017年63万人と比較すると2040年では51万人となり大学進学率が減少する予測となる。

一方で2012～2021年の大学進学率は2012年47.7%、2021年52.9%と5.2ポイント上昇し、特に東北地方の上昇率は全国的に3位となる。また、東北地方の地元残留率をみると岩手県、秋田県、山形県、福島県の4県は22.6%～28.3%と低水準となり他県への進学割合が高いといえる。宮城県は56.6%と全国比から見ても低水準とは言えない。このことから本学として他県の生徒をできるだけ本学に来てもらえるよう取組が必要と言える。全国で4割の大学で定員割れになっておりますます淘汰していくと考えられる。本報告では入学試験結果やOC来客数の動向を分析し、入学者数の確保に資する情報提供を目的とする。

【1. 年度ごとの学科別志願者数推移】

2018～2022年度の学科別志願者推移をみると心理福祉学科を除いた他学科では、2019年度をピークに減少傾向が続いている。線形予測(将来的な予測)において心理福祉学科のみ上昇傾向が見られるが、全体としては下向きになることを示唆しており2019年比で77%の水準にとどまっている。

2019年度の志願者増の理由は2016年度からの定員管理の厳格化により難化する大学が増え、受験生のマインドが安全思考に働いたと考えられる。また、2019年度以降の志願者減については、コロナ禍において高校訪問が行えなかったことやOCの中止により高校生が志望大学の情報を得ることが難しかったためと言える。しかし、本学の減少理由については、競合大学の動向や魅力発信不足など複合的なリサーチが必要と考える。

【2. 学科年度ごとの志願者数推移】

2018年度～2022年度の学科別志願者数推移を「年内(総合型選抜Ⅰ～Ⅲ期)、(姉妹校選抜総合型・学校推薦型)、(学校推薦型選抜エンカレッジ)、特別、特別(エンカレッジ)、学校推薦型選抜」と「年

明け（一般選抜 A～C 日程）、（大学入学共通テスト A～C 日程）（社会人選抜）」に分けて分析した。年内入試は比較的安定しているが、年明けの選抜においては急激な減少傾向にある。後半の志願者が大きく減少していることは、これまで第二、三希望の受け皿となっていた本学が、コロナ禍による経済的負担から入学検定料を抑制したことが一因と考えられる。このことから検定料や奨学金等の金銭的サポートについて検討することが考えられる。

【3. 学科・年度ごとの入学者数推移】

2018 年度～2022 年度の学科別入学者推移をみると線形予測において心理福祉学科は上向きであるが全体として入学者の減少が予測でき、2022 年度においては 4 学科すべてで減少に転ずる。近隣競合校においても同様に減少傾向であることから 18 歳人口の減少、新型コロナウイルスによる社会、経済的影響は無視できない。

【4. 学科・年度ごとの入学歩留まり率推移】

2018 年度～2022 年度における学科別歩留まり率を分析すると 2018 年度 31.2%をピークに 2022 年度では 13.5%と低水準である。この数字は大学の魅力にほかならず大学の魅力を高める授業や教職員による学生サポートの充実、奨学金等の充実や就職率、国家試験合格率など目に見える実績を魅力として発信していくことが重要である。

【5. 年度別オープンキャンパス参加者数、志願者数、入学者数の比較】

2014 年～2021 年度を分析すると参加者数、志願者数、入学者数には比較的強い正の相関関係が見られる。OC への参加者が増えれば入学者数も増加すると考えられるが、2020 年からの新型コロナウイルスの影響により OC への参加者は激減したにもかかわらず、入学者数には大きな影響はみられなかった。また、2019 年度 2018 年度では同水準の参加者数であったが入学者数は増加している。この点は引き続き分析が必要と考える。

【まとめ】

志願者、入学者数、入学歩留まり率とも減少していることが分かった。18 歳人口の減少や新型コロナウイルスなどの外的要因だけでなく、授業方法や質的情報、奨学金の充実、卒業後の進路、学生の成長の可視化など本学の魅力の発信が重要といえる。今後より広範なデータ分析を行う必要がある。

質疑応答

【遠藤氏】地元残留率について宮城県以外から宮城の大学に進学し宮城県で就職した場合は、残留したということになるのか。

【結城】企業の分析を参考にしているため、その点は確認していない。

【浅野氏】学修者の主体性の担保と学修効果の可視化の 2 つのポイントから考察しているが、学修効果の可視化は、質問項目から読み取れるものの、学修者の主体性の担保については何から読み取れるのか。

【呂】卒業時アンケートの質問項目にはないが、学修者の観点から大学の授業に対して評価をした項目が学修者の主体性につながると考えた。次年度は質問項目に追加したい。

評価・意見

木村 賢治朗 氏

事前資料の大学基準協会の当該箇所の提言部分から読み取ると、単位の実質化から質の担保とセットになると思うが単位の上限設定内であれば予習、復習が可能であり、上限を越えると中身が薄くなるということが基になっていると思う。しかしながら学生の視点から考えると自分の可能性や就職の幅を広げるために、多くの科目を学ぼうとしているのではないかと考える。学修成果の評価は DP の内容が、目指すべき理想像になっており DP を満たすための CP に基づいた授業があり、学位授与に対してどの程度の到達点をめざしているのかが分かりにくく、他に到達点を確認する方法があるのではないかと考える。PROG テストの結果を基にしてコミュニケーション能力等を伸ばすための授業やサポートが必要だと思う。人間性やコミュニケーション能力についての「大学でもっと学びたかったことはどんなことですか（資料図 6）」のアンケート結果が PROG テストにでる結果と思われる。この点をどのように対応していくのか。

また、大学の魅力をどのように発信していくかが大事である。企業等の新規採用時にはどのようなことを学びどのようなことを身に付けることができたのかが大事である。大小のコミュニティで考えると必要なコミュニケーション能力は異なる。本来の資格以外の能力や付加価値が必要になってくる。就職先の会社が卒業生をどのように受け止めているかの調査も必要ではないかと考える。

東北学院大学が移転するが何か対策があるのか伺いたい。

【学長】単位の厳格化については、予習復習を含めた履修計画を立てるようしている。DP については指摘の通りであるが達成度がわかるようにしたいと考えている。東北学院大学については、アパートやバスなど心配な点があるが対策はしていない。

【呂】単位の实質化につながるが、必修科目を低学年に履修するようになっているため、配当年次を調整することにより学習効果を高めることもできる。学生の興味・関心をサポートするため教員が専門性をもとに選択科目を提供することがサポートと考える。

清水 勝幸 氏

第一にアンケート回答数が低すぎるため回答者数を増やす必要がある。回答者は大学へ満足していると考え。ぜひ、工夫し継続して行ってほしい。学修者の主体性と学修成果の可視化は大学の大きなポイントある。学生の主体性をどのように成長させるかまた、大学もどのように学生と成長するかが大事である。アンケートを4年次のみではなく2年次にも行い、学生のことを理解しようとしている姿勢と一緒に成長していくということをアピールしてほしい。

遠藤 忠章 氏

報告の通り私立大学の定員割れについては社会的問題になっている。泉区のローケーションを踏まえ仙台駅から離れているというハード面を前提としながらも、優位性、差別化を図ることを試行錯誤していることを理解した。OC や保護者説明会、遠隔地受験など、多くの大学で行っていることであり、その中でどのような差別化を図るかが課題といえる。内容がすぐれていてもターゲット層に響かなければ意味がないのでここでも差別化が必要である。話はそれるが、首都圏の学生と比較すると東北の学生は大人しいと感じることがある。企業として、ポテンシャルの高い学生を獲得したい中で、対人場慣れた首都圏の学生と芯の強さを持ち備えている地方の学生の見極め、社会に出てからの伸びしろに期待をするとともに、その伸びしろを引き上げることは会社の責務である。話を戻すが、総合的な感想として是正や指摘事項が散見している。このことは課題が明確になっていることであり、回答や対応を一つ

ずつ潰していくことが改善につながるわけで、重要であり具体化が必要である。評価の人事評価システムについて評価者の訓練や被評価者へのフィードバックの機会を設けているなどが盛り込めればより現実的と考える。その他についても抽象的表現が多いが、他の学年からのアンケートや保護者からの意見を IR に反映させ、白百合のブランドをアピールしてみてもどうか。このことが 360 度評価につながるのではないかと考える。今後さらなる将来を見据えた取り組みを続けてほしい。どこのセクションがいつまでに何をどうやって実施するのか課題解決のプロセスを明確に取り組んでほしい。

福井 公美子 氏

「私たちの NPO 法人は活動する大部分が女子である。女子の力を発揮できる場がふえることを望む。就職などの面から資格取得を考えると国家試験の合格率低下が気になった。小規模大学だからこそきめ細やかな試験対策などの指導ができるのではないか。白百合だからこそその魅力を発信してほしい。NPO 活動においても SNS の活用や口コミなど情報発信をした。白百合も学生からの口コミが大切と考える。」

藤村 純子 氏

卒業生であり現在、採用担当をしている。学生が大学で「自分の気持ち・考えを的確に表現できる能力」「自分の就きたい仕事に直接官益する知識・技術」を身に付けることができたことの数字が高いことは評価できる。企業側からも必要な能力と言える。自分の時にはプレゼンテーションの授業が少なかったように思うが、社会に出て実践的な授業が多い方がいいと思う。白百合のブランドで OC では地元企業と連携し何かができればいいと考える。また、宮城学院女子大学と比較されると思うが、どちらも資格や学科が同じようであり、その中で白百合ならではのアピールをして頑張っていたきたい。

浅野 浩子 氏

調査は有意義であると思う。年度ごとの比較で継続していただきたい。学修者の主体性の担保については授業評価で評価できるのではないか。公表できる部分で調査し、将来的にループリックにつなげていただきたい。入試に関しては、年明けの受験生が減少しているが要因としては新型コロナウイルスの影響が挙げられたが、同意はする。しかし、他大学も年明けの入試での入学者確保に力を入れている。外部評価委員のコメントにあった保護者の皆様の声を取り入れてはどうかと考えた。

大本 泉

貴重なご意見ありがとうございました。ご指摘の通り差異化を図った教育を考える必要がある。女子力についてのご意見があったが、本学として女性の自立としての資格は必要である。しかし資格プラス社会人基礎力が必要と考える。そのような教育ができるよう頑張っていきたい。AI 数理データサイエンスなども取り込みながら社会で活躍できる育成をめざし学生と共に成長していきたいと考える。

閉会挨拶

PDCA は内部の視点のみとなるが、今回の外部評価委員会により外部からの視点での貴重なご意見をいただき感謝するとともに今回の皆様の意見を大学経営に反映していきたい。

2022 年度外部評価委員会を終えて

新型コロナウイルス感染症の影響下を抜け出せないながらも、本学では、学生・教職員ともども学習と改良を重ねながら教育研究活動を継続することができた。コロナ禍を通して浮かび上がった課題は多いが、同時に新たな教育の可能性も浮上した。それらを視野に入れながら、ポスト・コロナの状況を力強く歩んでいきたい。さて、今年度の外部評価委員会も、昨年が続いて対面ではなく ZOOM を用いる形となった。学内外を含め、決済を含むいろいろな会議がオンライン形式で行われるようになったことを考えると、これも時代の流れなのかもしれない。対面、オンライン、ハイブリッドのメリット・デメリットを勘案しながら今後のことを考えていきたい。今年度の外部評価委員は、本学が所在する地方自治体から、また地元産業界から、高等学校関係者から、同窓生から、NPO から、前教職員から、性別や年齢のバランスを考慮しながら人選を行った。2 年連続の方と初年度の方が混じって、多様な顔ぶれとなった。

外部評価にはいろいろなやり方があって大学によって様子が異なるが、本学では毎年網羅的に評価を行うのではなく、評価項目を絞り、複数年のサイクルのなかで全体的評価が行われる方法を採用している。昨年度は「内部質保証」「学生支援」「地域貢献」を評価項目としたが、今年度は教育の質に関わる「教育課程・学習成果」、入試に関わる「入学者選抜」を主たる評価対象とした。

外部評価委員からは多岐にわたるご指摘をいただいたが、学習成果の評価法や可視化の重要性、入学者確保のための差別化、保護者評価の重要性、口コミの重要性、地元企業との連携等々に関する意見は、大学が直面する重要課題に示唆を与えるものであった。意見のなかにはすぐに採用できるアイデアもあって、外部評価の意義を痛感させられた。改めて外部評価委員の皆様へ感謝申し上げるとともに、ご期待・ご要望に沿えるよう一層の努力をしなければという思いを強くした。

学長・矢口洋生